

モスクワのエスペランチスト達との出会い

[Renkontiĝo kun moskvaj Esperantistoj en 9-10 marto de 2009]

佐々木照央

2009年3月9日、4時から7時半にかけて、モスクワの「ヨーロッパ大学 JUSTO (Eŭropa Universitato Justo)において、モスクワのエスペランチストたちの会合「レフ・トルストイ倶楽部」に招かれた。準備して下さったのは学長のシーロ博士 Ŝilo, Gennadij Miĥailoviĉ、国際婦人デーという祝祭中にもかかわらず、多数の人々が集まった。僕のモスクワ滞在に合わせて急遽会合がもたれたという。

かねてより『エヴゲーニイ・オネーギン』の世界語訳者メーリニコフ Melnikov, Valentin Viktoroviĉ にお目にかかりたいと願っていたが、ここで実現した。芭蕉の世界語訳の校正をお願いしたら、こころよく引き受けて下さった。彼の翻訳にたいする僕の批評をとでも喜んでくれ、自分にも気付かなかったことを指摘してくれた、と言われた。なお、その三日後 Санкт・ペテルブルグの科学アカデミーロシア文学研究所「プーシキン館」を訪問したとき、元所長のフオミチョフ博士に世界語訳『オネーギン』の優秀さを伝えると、是非送付してほしいと要望され、メーリニコフ氏を紹介しお互いに連絡するよう僕が仲介した。ロシア文学の総本山にはネクラーフ訳一点しか所蔵されていないのである。ほかに7つもある、というと驚嘆されていた。本家本元のロシア文学研究者の間でエスペラント熱が高まるのもそう遠い日ではない。

モスクワのトルストイ倶楽部で僕は僕の知っているロシア語の詩を暗唱するよう求められ、プーシキンの『青銅の騎士』の出だしを朗読し、レールモントフの詩の一節を歌った。またたくさんの質問攻めにあい、エスペラントで応答した。集まった人々の名は次の通りである。

Gudskov, Nikolaj Lvoviĉ; Ilutoviĉ, Klara Sergeevna; Aroloviĉ, Viktor Semionoviĉ;
Ĉertilov, M.; Ŝevĉenko, Aleksandr; Samodaj, Vladimir Vladimiroviĉ; Sveta;
Edelštejn, Vladimir Aleksandroviĉ; Ĥmelinskij, Vadim Miĥailoviĉ; Hutoviĉ;
Agafonova; Lysova; Smetanina; Grišin; Melnikov, Valentin Viktoroviĉ;
Ŝilo, Gennadij Miĥailoviĉ

等、錚々たる人々である。エロシエンコが話題に上ったとき、彼はスターリンの弾圧はまぬかれたものの、彼の著作が盲人用の点字で書かれていて、死後大量の紙が残されたものの、無知な人間の手に渡り焼却されてしまった、とメーリニコフ氏は言った。粛清時に多くのエスペランチスト達が根も葉もない罪を着せられ、トロツキストとして処刑または流刑された。僕が出会った上記の人々はその空白を埋め、さらにエスペラント文学を豊富にしようと努力している。何人かの簡略な経歴を記しておこう。

グツコーフ氏は1953年モスクワ生まれ。生物学が専門で、科学技術史家。1989年からエスペラント教師となり、かつ人権運動活動家でもある。現在哲学も教える。1982年に『化学と生活』誌の B. Kolker の紙上世界語コースでエスペラントを知るが、エスペランチストとなったのは1985年である。1988-1992年にエスペラント教育コープ「コプソ」(E-instrua kooperativo “Kopso”)の主要メンバーでコンツェボフスキイ Koncebovskij S、ゴンチャローヴァ Gonĉarova Iたちと一緒に教育活動に励んだ。2000年、モスクワでの SAT 会議の組織、ロシアエスペラントユニオン REU の理事 estrarano 及び会長(1994-95, 2002-2005)、ブダペストの隔週誌『出来事』Eventoj 編集者(1993-1994)、SAT メンバーで、「人民ロシアエスペラント運動 Popola Rusia Esperanto Movado」の主導者である。著書・評論も多数で、手がけた刊行物も多い、中でも日本に関係あるエロシエンコの『チュクチの生活より El vivo de la ĉukĉoj』(1992)の発行にも加わる。

サモダーイ氏は1936年オデッサ生まれ。1958年にエスペランチストとなる。教わった師はヴェルシーニン Verŝinin A.I. 1960年モスクワ大学東洋語学部に入學、専門はアラビア語。イエメン、イラク、シリアで通訳として勤務。その後ジャーナリストとなる。『モスクワニュース』(週刊、多言

語)で働き、アラビア語やエスペラント語を担当、その1989年のエスペラント語部門は注目を浴びた。SSOD(対外友好文化連合ソ連協会ユニオン Unuiĝo sw Sovetiaj Societoj de Amikeco kaj Kulturaj Ligoj kun Eksterlando)のソヴィエトエスペランチスト対外連盟委員会で1960年代から70年代において活動、出版などでコンスタンチン・ゲーセフを支えた。ソヴィエトエスペラント青年運動SEJMの創立者の一人。1979年ASE(ソ連エスペランチスト協会 Asocio de Sovetiaj Esperantistoj)設立後その副会長となる。B. Kolker, A. Gončarovと共にソ連エスペランチストユニオン(1938年消滅)SEUを再建、1989-1990年にその初代会長に選出された。2004年からUEA名誉会員。ロシアエスペラント文化のために多大な貢献をし、1990年からモスクワ文学エスペラントクラブMLEKを指導、文集『脳と心で Cerbe kaj Kore』を編集発行した。彼の詩作、著作はWilliam Auldにも高く評価された。温厚な好々爺という感じで親しみやすく、僕にも氏の発行する雑誌に寄稿するよう求められた。

イルトーヴィチ女史は僕と同じ1946年生まれ、モスクワ大学言語文化学部を卒業、1991年にグツコフ氏に学びエスペランチストとなる。1995年から詩作、MLEKOに積極的に参加、彼女の詩は多くの雑誌に掲載された。("Cerbe kaj Kore", "Ruslanda Esperantisto", "Moskva Gazeto", "La Ondo de Esperanto", "Scienco kaj Kulturo", "Litova Stelo"等)2005年には自費出版で本を出版している。また、ロシア語からの翻訳、『実生活におけるプーシキン Puŝkin en la vivo』(ヴェレサエフ著)も彼女の重要な仕事である。少し憂いのある表情をした知的な美女。神経を病んでいるという。

エーデルシュテイン氏は1920年ハリコフ生まれ。モスクワ大学卒の数学教師。1988年にエスペランチストとなる。トルストイ倶楽部でゴンチャロフに学ぶ。MLEKに積極的に投稿。Cerbe kaj Koreに発表。1996年からはエスペラントを教える。

フメリンスキイ氏は1935年生まれ、モスクワ大学大学院化学工学部卒業、失明し、その後視覚障害者のために働く。1982年エスペランチストになる。盲目エスペランチストのクラブ「モスクワ人 Moskvano」を長い間指導。同時に科学者エスペランチストのクラブ「知識 Scio」に積極的に参加。エスペラントを学び始めて二週間で執筆開始。彼の詩や著作は点字誌にも掲載された。目をつぶたまま上を向いてずっとしゃべり続ける不思議な人だった。その傍らには若い盲目の少女がついていた。彼女のエスペラントも素晴らしかった。

アロローヴィチ氏は1946年リガに生まれた。モスクワ大学で数学を専攻、理学博士候補。1966年にエスペランチストとなり、70年代にはSEJMの指導者の一人となる。80年代にASEを通して普及活動。1990-1991年SEU(Sovetrespublikara Esperantista Unio)最後の会長。1992-1993年ロシアエスペランチストユニオンREU(Rusa Esperantista Unio)初代会長。

メーリニコフ氏は1957年モスクワ生まれ。化学関係の技師で今はプログラミスト。バスや電車の車掌もした。クイズやゲームを好む。1982年、ボリス・コルケル B. Kolker のエスペラント講座(『化学と生活』誌)を読んでエスペラントを学ぶ。REUの点検委員会 Revizia Komisiono 委員に何度も選出。またREUの証明・言語委員会 Atesta kaj Lingva Komisiono 委員、文学委員を務める。『エスペラントの波 La Ondo de Esperanto』誌編集者。1983年から詩の翻訳。1989年から自ら詩作。多くの雑誌に発表("Paco", "Hungara Vivo", "Moskva Gazeto", "Ruslanda Esperantisto", "La Ondo de Esperanto", "Literatura Fojro"等)。彼の詩集は"Moskvaro"誌に掲載された。MLEKに積極的に参加。1998-2000年"Cerbe kaj Kore"誌編集。2005年に『エヴゲーニイ・オネーギン』世界語訳出版。いかつい顔の厳しいまなざし、エキセントリックな感じを与え、鋭い発言により仲間との関係が悪化することもあった、という。しかし僕に対してはごく普通に話しかけてくださった。こわもての外見、しかし中身はとても謹厳実直な人物と思える。僕の芭蕉訳を面白いと言い、推敲の援助を約束してくれた。

シーロ学長は訪露にあたって予め連絡をとり、僕の要望を伝えておいた。彼とはオランダでの去年の会議で同席し、顔見知りであった。僕とメーリニコフ氏との間をとりもってくれたのみならず、モスクワのエスペランチストの会合をわざわざ開いてくださった。ヨーロッパ大学 JUSTO の学長であ

り、そこが会合の場となった。その大学はエスペラントを中心にして、法律と経済を教え、法律の専門家を育成している。最初シーロ氏らがたった二人で創立した。シーロ氏自身、法律専門で弁護士でもある。そこでは、速記とブライドタッチのタイプを訓練させ、より速くメモをとり、記録する能力を身に付けさせる。集中教育方式で、一週間連続集中で一つの課目、例えば法律、を教える。エスペラントはラテン語の法律用語を教えるのに都合が良く、また理路整然と論理展開する訓練に役立つ、という。法廷を想定してエスペラントでの裁判劇をテキストに採用している。これはシーロ夫妻が作成した大学のエスペラント教科書(*Esperanto dum 7 tagoj*, 2007)を見れば、速記と裁判劇に多くの頁があてられていることでわかる。

大学は1995年にシーロ氏とコムコフ氏(エリツィン、プーチンの側近)によって創立され、効率的、速成的教育によって、多くの人材を官界、政界、経済界に提供してきている。外国で活躍する卒業生も多い。日本で有名な若手ピアニスト、コロベニコフもこの卒業生(2003年卒)の一人で、シーロ氏の愛弟子である。エスペラントを基本に取り入れた外国語教育によって語学能力の高い人材を育成している。ただし、去年から入学者が減っていること、大学の建物の入手がままならないこと、など問題も抱えている。

僕は3月10日10時から12時まで「日本におけるエスペラントとロシア文学」について、エスペラントとロシア語で講義した。シーロ氏から急遽依頼されたためである。二葉亭四迷について、大杉栄と中国人留学生について、エロシェンコについて学生たちに語った。9日の夜はシーロ氏の郊外のお宅に泊めてもらい、奥さんのリアナさん、娘のソフィヤちゃんの歓迎を受けた。シーロ氏もエスペラントのために70年代不当な評価を受け、苦勞したという。論文や成績など、好ましくない材料を用いているという理由で低い評価を受け、就職などで差別された、とのこと。しかし、弁護士として優秀さを認められ、今日の地位を築いてきた。エスペラントは大学設立当初から中心に据えようと意図していた。速記とタイプとエスペラント、プラス法律経済知識、これが氏の教育の眼目である。僕には、文学的素養の大切さを学生に教えてほしい、と要望され講義することとなった。

シーロ氏の大学設立は刺激的である。日本の法科大学院でエスペラントが教えられる日がくるだろうか？ 模擬裁判をエスペラント劇にしたテキストによって、生徒たちに芝居をさせながら討論術を教える、という方法もなかなか独特である。

モスクワのエスペランチスト達との出会いは僕にとって歴史的な事件であった。スターリンの忌まわしい粛清の犠牲となったエスペランチスト達の衣鉢を継ぐ後継者たちが今高い水準の活動をしているのを、僕はみた。ロシアは再び世界のエスペラント運動の一翼をになうことだろう。今回、『エヴゲーニイ・オネーギン』のエスペラント訳の優秀さをロシア文学研究者たちに伝えることができ、ロシア国内の結びつきを拡大することができた。また、モスクワではチェーホフ劇の舞台監督グルチェンコ氏にチェーホフの同級生ザメンホフのことを語ると、チェーホフ劇のエスペラント訳で舞台を作って二人の生誕「150周年」を祝おう、「同級生から同級生への贈り物だ」と彼の口から言われた。それをシーロ氏にも伝えておいた。シーロ氏もこの提案には乗り気だった。ロシア文学における僕のコネがロシアのエスペラント網の拡大に役立つなら、とても嬉しい。ロシア文学の研究にエスペラント訳が不可欠の資料となる時代が来た。日本文学の研究にもその時代が来ることだろう。